

# KOBEの本棚

— 神戸ふるさと文庫だより —

第 80 号 平成 27 年 7 月 20 日

編集・発行 神戸市立中央図書館

〒650-0017神戸市中央区楠町7-2-1 (078)371-3351



大倉山公園 いのちと平和の碑

## 学童疎開

今年には第二次世界大戦終戦から七十年の節目の年です。広島・長崎への原爆投下という大きな犠牲をはらい、昭和二十年八月十五日、戦争が終わりました。戦時中、人々は大切な人との別れや空腹に耐え、空襲におびえる日々を過ごしました。

昭和十九年、空襲が激しさを増すなか、政府は子どもたちの疎開を閣議決定しました。「学童疎開都市」に指定された神戸市は、市内の国民学校に通う三年生から六年生の児童を順次疎開させることにしました。兵庫県下を中心に岡山・鳥取へ、合わせて約一万七千人の子どもたちが集団疎開していきました。

但馬出身の児童文学者、森はなさんの作品『じろはったん』の中には神戸から県北部の養父のお寺へ集団疎開してきた子どもたちが書かれています。さびしさやひもじさ、子ども同士のいさかいなどから元気をなくしていく子どもたちを、知的障害のある地元の青年じろはったんは、いつも守ってくれました。

戦争が終わり、帰ってきた子どもたちが見たのは、相次ぐ空襲で姿を変えた神戸の町でした。

### 湊山ものがたり—伝えたい風景、残したい記憶。神戸市立湊山小学校

今年三月、一四一年の歴史に幕を閉じた市立湊山小学校の記念誌。

一章では、神戸海軍操練所を移築した校舎、錨に英語のSを組み合わせた斬新なデザインの校章などのエピソードとともに校史が語られる。三章では、湊川や校区の生き物など地域の自然を紹介。

卒業生から寄せられた「湊山あるある思い出物語」や学校生活の写真が大切な思い出として収められている。

### 絶滅企業に学べー！今はなき人気企業に学ぶ10の「勝因」と「敗因」 指南役（大和書房）

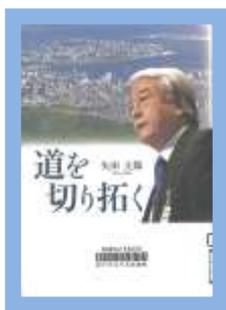
一時代を築きつつも消えた企業を全十章で紹介し、その勝因と敗因を各章の最後でまとめている。

神戸では鈴木商店が取り上げられている。一介の個人商店から総合商社に上り詰めた成長には、大番頭金子直吉の才覚が不可欠であった。しかし敗因も晩年、人の意見に耳を傾けなくなつた金子にあったと述べている。一世を風靡した企業の物語には経営のヒントが詰まっている。



### 道を切り拓く 矢田立郎（神戸新聞総合出版センター）

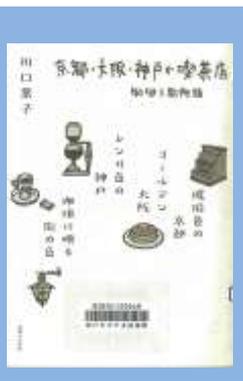
著者は前神戸市長である。五歳で神戸空襲に遭い、九死に一生を得た幼少期から市長退任まで、行政マン時代を中心に、自らの四分の三世紀の歩みを振り返る。ポトアイランド誕生、ユニバーシアード神戸大会、阪神・淡路大震災など行政現場の様々なシーン、人々との出会いが記されている。タイトルには「足跡が全くない道を歩むため挑戦し、振り返れば道が付いている、道は自らが切り拓いていくもの」という著者の想いが込められており、また全編を貫くテーマともなっている。



### 京都・大阪・神戸の喫茶店—珈琲三都物語 川口菓子（実業之日本社）

神戸にお住まいの方なら少なからず見聞きしたことがあるだろう老舗喫茶店と新名所を紹介する。

神戸の喫茶店には、京都とも大阪とも異なる独自の伝統があり、内装やメニューに個性がありながら、文化的な佇まいを見せていると著者は言う。家で紅茶を飲み、外で珈琲を飲むと語られる神戸人自分のこだわりの一杯を見つけてみてはいかが。



### 木の文化を守る匠の技と心—竹中大工道具館三十周年記念 竹中大工道具館

本書は、二部構成で、前半では、「数寄屋の美学」「堂宮大工の心」「大工道具へのこだわり」「未来へつなぐものづくり」と題して、技と正確さへのこだわりについて匠たちの熱い思いが語られる。後半では、館の様々な企画や工夫を凝らした展覧会の数々が年ごとの一覧表で示されている。

本書は、匠の技を残し、未来へとつなげることを使命とする館の三十年の過去を振り返り、更に未来を指し示す一書である。



### 雨に泣いている 真山仁（幻冬舎）

物語は、阪神・淡路大震災翌日の新聞記事から始まる。奇跡の生還—瓦礫の下から少女を救出、という記事には悲劇的な後日談があった。担当した記者は、取り返しのつかない記事を書いた自責の念と取材への恐怖をかかえていた。東日本大震災が起こった時、記者は東北へ行き、被災者と向き合い記事を書く。そして津波で命を失ったある僧侶の過去へと迫る。

著者は元新聞記者で、後のフリーライター時代に垂水で震災を経験する。本書はそれから二十年后に書かれた小説である。

### 幻の五大美術館と明治の実業家たち

中野明 (祥伝社)

川崎造船所の創設者である川崎正蔵は、美術品の蒐集家としても有名だった。神戸市加納町にあった邸宅の一角を私設の美術館とし、公開もしていた。しかし、本人の死後、金融恐慌の影響で川崎造船所は破綻、蒐集品は散逸してしまふ。本書は、他に松方幸次郎など質量ともに十分なコレクションを持ちながら公開するに至らなかった実業家五人を取り上げ、彼らの蒐集品の全貌と美術館設立頓挫の過程を解き明かしている。

### カツチン いずみたかひろ作 津田

檀冬絵 (小峰書店)

舞台は一九五九年、終戦から四年経った神戸。兵庫運河の流れる街で暮らす小学五年生、カツチンの日々の出来事が描かれる。

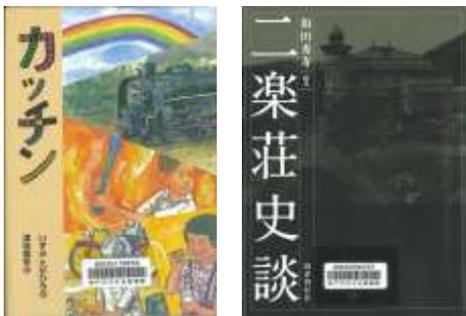
ダルマ船で暮らす少女、北朝鮮に帰ることになった親友、くず鉄拾いで家計を支える同級生らとの温かい交流や、それを優しく見守る周りの大人たち。

貧しくとも逞しく生きていた時代の空気とともに、当時の神戸の懐かしい情景が浮かび上がる。

### 二楽荘史談 和田秀寿編著 (国書刊行会)

西本願寺の宗主大谷光瑞は明治四二年(一九〇九)現在の東灘区に別邸として二楽荘を建てた。山上に威容を誇る姿は評判を呼び、一般公開されると見物人が押し寄せた。

平成十一年(一九九九)芦屋市立美術館で「モダニズム再考 二楽荘と大谷探検隊」という展覧会が開催され、後にパートⅡも開かれた。この二回の展示図録を再構成し新しい研究成果を加えたものが本書である。二楽荘は存在した期間が短く資料はあまり残されていないが、現時点での二楽荘研究の集大成と言っても過言ではないだろう。



### II その他の新刊 II

住吉のだんじり写真集 住吉地車振興会

伝えたい、大沢町出征兵士からのメッセージ 藤崎潤 (大沢町遺族会)

広告写真のモダニズム—写真家・中山岩太と一九三〇年代 松實輝彦 (青弓社)

兵庫の陶磁—多彩な窯場、その成立と発展を探る 兵庫陶芸美術館

### 神戸あんな人こんな人 その④

亀井 一成 昭和5年(1930年)~平成22年(2010年)  
王子動物園飼育員・学芸員

神戸生まれの動物好き少年、亀井一成は昭和25年、19歳で縁あって神戸市立諏訪山動物園(現市立王子動物園)で働き始めます。同年3月に開かれた「神戸博」で来神したインド象の世話係になり、半世紀にわたる亀井の動物園勤務が始まります。

亀井を一気に有名にしたのが、日本初のチンパンジーの赤ちゃんチェリーの人工哺育です。昭和36年、王子動物園での国内初のチンパンジーの出産は、母猿の育児拒否で生育は失敗に終わります。同38年6月、チェリーが生まれると、亀井は夜には自宅に連れ帰るなど、懸命の「子育て」を行い、人工哺育に成功します。さらにその後も3頭を育て上げ、これらの功績により、昭和49年には「日本動物園水族館協会技術賞」を受賞します。

亀井は、飼育員として、誰にも負けない動物への愛情と仕事への情熱を持ち続けた人でした。定年退職後も、園内の動物科学館で「子ども動物相談」を担当し、動物の不思議、素晴らしさから、生態系や生命の尊厳など、私たちが忘れてはならない大切なメッセージを発信し続けました。

著書：『動物の赤ちゃんを育てる 動物園飼育員50年』朝日新聞社、  
『チンパンジー赤ちゃんの日記』ポプラ社 など多数

平野の温泉

天然温泉が兵庫区の北部に湧き出ているのをご存じでしょうか。平野の祇園神社の麓、天王谷川（てんのやがわ）のほとりです。神社の祭神が牛頭天王（ごずてんおう）であることからこのあたりを天王谷といいますが、かつては川をはさんで二軒の温泉施設がありましたが、東岸の天王温泉は平成十六年に閉店しました。少し上流西岸の湊山温泉も、利用客減少等の理由から平成二十七年五月、閉店する予定でした。しかしその直前、静岡の企業から運営協力の申し出があったのです。平清盛ゆかりの由緒ある温泉の存続に、地元は喜びの声に包まれました。

平清盛は一一六七年、太政大臣の位を辞し隠居する地を、当時福原と呼ばれた平野に求めました。公卿、中山忠親（なかのただちか）の日記『山槐記（さんかいき）』一一七九年六月の条に「清盛邸を去る一丁ばかりにある湯屋へ車でわたらせ給う」とあります。清盛邸「雪の御所」は元湊山小学校の場所だと推定されているので、そこから一丁（約一〇九m）の温泉というと、湊山・

天王温泉付近と考えられます。温泉が文献に登場した最初です。清盛や平氏の人々が温泉に入っていたことは想像に難くありません。

それから約四百年後の慶長元年（一五九六）一二月、豊臣秀吉が兵庫津の豪商正直屋寿閑に「湊川上温泉」開設を許可した朱印状を与えています。この年閏七月、近畿に大地震があり、兵庫の町は壊滅に近い被害を受けました。温泉も壊れたため、秀吉は寿閑に復興させたのだろうと考えられています。湊川の上流は天王谷川なので、清盛時代と泉源は同じだと思われまます。

その後、温泉場はいつしか途絶えていました。明治六年、紀州の人が温泉の復活を計画するも地元の反対で成らず、奥平野村など土地の人たちが組合をつくり温泉を開設。しかし損失が大きくなり、明治十一年に廃業。明治十八年に林原吾氏が湊山温泉を再開しました（『神戸開港三十年史』明治三一年）。

名所案内書『神戸の花』（明治三十年）などに、料亭や旅館が軒を連ね、入浴を兼ねた客で賑わう様子が紹介されています。

明治三十七年には、料亭金佐亭の経営者秋田幸平氏が天王温泉を開業、

浴場を新築しました。温泉は金佐温泉とも呼ばれました（『系図かのみ』大正元年）。

一方、湊山温泉は明治後期に一時衰退したのち、盛り返したようです。『兵庫県統計書』によると、大正十一年の延入浴客数は湊山温泉二四六、二二五人、金佐温泉二一五、五〇〇人もありました。



七月九日 湊山温泉 『神戸市水害誌附圖』より

昭和十三年七月五日、神戸・阪神地方を大水害が襲いました。

天王谷川と石井川にはさまれたこの地域の被害も凄まじいものでした。天王谷川は、昭和六年、湊山温泉付近から石井川との合流地点までを暗渠にして、上は公園遊歩道となりました。暗渠入口が土砂・流木でふさがれ、激流が遊歩道の路面に飛

び出し、両側の人家に氾濫、両温泉にも土砂がなだれこみました（『湊區水害誌』昭和十四年）。

当館所蔵『神戸市大水害スケッチ』には、湊山温泉の屋根に「天然温泉 異状なし」と大書された看板が描かれています。神戸新聞の昭和十三年八月一六日記事に、「幸ひに源泉には何等異常なく一昼夜六千石の天然泉が滾々として湧出してゐるので経営者持田常吉翁はこれを機として豫（かね）ての計画通り株式組織に変更し更正復興せしむべく八方奔走中」とあります。

阪神・淡路大震災の時も、新聞の生活情報欄「利用できる浴場」に湊山温泉、天王温泉の名前がありました。あの時、お風呂がどんなに有難かったことでしょう。何度もよみがえってきた道のりに、良質な源泉を守り活用したいという人々の思いが感じられます。



『神戸市大水害スケッチ』図書館ホームページ貴重資料デジタルアーカイブズより